

小学校体育授業における「みるスポーツ」の重要性

坂本史生

東京福祉大学 教育学部 (池袋キャンパス)

〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-47-8

(2019年11月30日受付、2020年3月19日受理)

抄録：国の指針である学習指導要領の記述を分析するとスポーツを「する」ことだけでなく、「みるスポーツ」をはじめとした多様なスポーツへの関わり方を重視している一方、そこで示される具体的な提示については「するスポーツ」に関するものに傾重しており、「みるスポーツ」を「いつ」「何を」「どのように」教えるかが示されていないという課題を指摘した。また、学習指導要領が傾重したことが要因の一つとなって、体育授業実践においても「みるスポーツ」に焦点を当てた実践が行われていないという可能性も示唆された。このことから、生涯スポーツを志向する学校体育であるからこそ「文化」としてのスポーツという視座が必要であり、「する」ことだけに終始するのではなく、多様なスポーツの「みかた」を享受できるように授業構成や指導が重要であることが示唆された。

(別刷請求先：坂本史生)

キーワード：体育科教育、みるスポーツ、体育授業実践

I. 緒言

スポーツ庁の2018年調査によると、2017年の1年間に直接現地でスポーツを観戦した割合は26.8%、テレビやインターネットなどでスポーツを観戦した割合は75.7%であったという。(スポーツ庁, 2018) 日本開催となったラグビーワールドカップ2019の瞬間最高視聴率は46.1%であった。このような近年のスポーツ視聴傾向を考えると、東京2020オリンピック・パラリンピックという国際的スポーツイベントを通して、日本国内における「みるスポーツ」への意識はさらに高まっていくと考えられる。ここでいう「みるスポーツ」とは、小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省, 2018)において「するスポーツ」「みるスポーツ」「支えるスポーツ」「知るスポーツ」という4つに分類して示されるスポーツ参加のかたちの一つである。加えて「みるスポーツ」は競技場で直にスポーツを観戦する直接観戦とテレビなどの情報メディアを通して観戦する間接観戦と大別される(佐藤, 2011)が、本論で扱う「みるスポーツ」は両者を含む広義の意味での「みるスポーツ」である。

一方、スポーツを実際に身体活動として行う「するスポーツ」について、その割合をみると、1年間に運動・スポーツを行った人は、80.2%であると報告されている。(スポーツ庁, 2018年) その内訳としては「ウォーキング」が62.1%と最も割合が高く、次いで「階段昇降」16.0%、トレーニング15.4%となっている。また、運動・スポーツを行った理由

については、複数回答で「健康のため」77.9%、「体力増進・維持のため」58.3%、「運動不足を感じるから」52.2%という3つの理由の割合が高く、単一回答においても「健康のため」が35.5%と最も高い割合となっている。

これらの状況から、「するスポーツ」は健康のために必要最低限の行為、「みるスポーツ」は単に楽しみのための行為というような構図が浮かんでくる。「スポーツ」というその言葉の本質的な意味は、健康を維持したり、体力を高めたりするための身体活動だけではなく、「あそび」の概念を含んだ余暇の時間である(松田ら, 1997) ことから考えると、現代においては、健康のために仕方なく行う「するスポーツ」よりも、自身の楽しみのために行う「みるスポーツ」の方よりスポーツの本質を見出せるように思われる。

そのような背景の中、杉本(2016)の「観戦学の視座－多様化する観戦の楽しみ方」や橋本(2015)の「観客と視聴者の相違」など「スポーツをみる」という行為を社会学の視点から論じた研究など、「みるスポーツ」については多数の研究者が関心を寄せ数々の研究が行なわれている。しかし、学校体育において「みるスポーツ」をどのように扱っていくかについて論じている研究はほとんど見られないのが現状である。

日本という国においては、多くの人が共通して平等にスポーツに触れる機会がある。学校体育の時間はその大きな役割の一つを担っており、日本の多くの子どもは小学校期に学校体育の時間で多様なスポーツに出会うことになる。

「みるスポーツ」が隆盛の一途を辿る今だからこそ、この学校体育において「みるスポーツ」がどのように位置付けられなければならないのか、またどのような役割を果たさなければならないのかを明らかにしておく必要がある。

本研究は「みるスポーツ」が学校体育の中でどのように扱われているのか明らかにすることで、今後の学校体育における前述した「みるスポーツ」の位置付けを検討することを目的としている。

Ⅱ. 研究対象と方法

小学校学習指導要領解説(体育編)は、日本の小学校で行う教育活動の指針である小学校学習指導要領の中で体育に焦点を絞ってその意図や具体的方法を詳しく解説しているものであり、小学校教諭が体育授業を行う際にベースになるべきものである。したがって、その最新版である2018年に改定された小学校学習指導要領解説(体育編)は、今後の体育授業のあり方が示されており、今後の体育授業の実践に大きく影響もつと考えることができる。また、小学校学習指導要領解説(体育編)をベースに体育授業の実践は行われるため、その改定と関連して体育授業の実践に変化が起きると考え、前回の学習指導要領の改定である2008年から今回の改定後2019年11月までの授業実践を調査することで「みるスポーツ」が小学校体育でどのように扱われようとしているのかを検討することとした。授業実践の調査には、体育の授業実践研究の主要雑誌であり、授業実践研究が継続して掲載されていることを条件とした。

以上のことから、2018年に改定された小学校学習指導要領解説(体育編)において本調査に関連する主要な記述を抜粋する。また、2008年改定の学習指導要領からこれまでの体育授業実践のオピニオンの研究雑誌である「体育科教育」(大修館書店)の2008年1月～2019年11月までの目次から「みるスポーツ」に関連する記述を抽出する。そして、これら一連の記述から「みるスポーツ」が小学校体育科においてどのように扱われているのか、その傾向と課題について分析・考察を行う。

Ⅲ. 資料

表1に示すように、小学校学習指導要領解説(体育編)(文部科学省、2018)の文中から「みるスポーツ」に関する記述を抽出した。小学校学習指導要領解説(体育編)(文部科学省、2018)からは計12箇所「みるスポーツ」に関する記述が抽出された。

また表2は、「体育科教育」の2008年1月から2019年11月号までの雑誌内で「みるスポーツ」に関連がある記事を抽出している。2008年の1月号から「体育科教育」内の記事を追っていくと、実践報告や授業提案など学校教育や子どもたちの学習といった視点で「みるスポーツ」について書かれている記事は、計8編の抽出に留まった。

Ⅳ. 資料からみる考察

1. 学習指導要領の「するスポーツ」偏重

体育という教科の設置当初は「強い身体をつくる」ことが目的の教科であった。しかし、近年では「生涯にわたって豊かなスポーツライフを送る」といういわゆる「生涯スポーツ」が教科としての大きな目標となっているのは周知の事実であろう。(文部省、1998; 文部科学省、2008, 2018) またこの目標は、小学校学習指導要領解説(体育編)(文部科学省、2018)で「生涯にわたって運動やスポーツを日常生活の中に積極的に取り入れ、生活の重要な一部とすることを目指している」と示されるように、体育科での学習内容を日常生活に活かすということでもある。これは、広く日常生活に文化として根付いているスポーツをどのように楽しむかという視点に他ならない。

スポーツに親しむということは、スポーツを「する」ということだけではないのはスポーツ観戦での熱狂やオリンピックのボランティアなどからも容易に想像することができる。小学校学習指導要領解説(体育編)(文部科学省、2018)においてもスポーツ参加のかたちとして「するスポーツ」「みるスポーツ」「支えるスポーツ」、さらに今回の改定では加えて「知るスポーツ」という多様な関わり方が明確に示されている。

スポーツへの多様な関わり方という視点に関連して、小学校学習指導要領解説(体育編)(2018)では「体育の見方・考え方」という文言を多く目にする。この「体育の見方・考え方」は「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」であることが理解できる。また、合わせて「運動やスポーツに対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、資質・能力の三つの柱をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図ること」が重要であるとも示されている。

このように、学校体育においても「みるスポーツ」をはじめとする「する」以外のスポーツへの多様な関わり方が重要視されている。

表1. 2018年学習指導要領解説(体育編)の「みるスポーツ」記述抽出表

ページ	目次	記述内容
6	第1章総説、2体育科改訂の趣旨及び要点、(1) 体育科改訂の趣旨、①原稿学習指導要領の成果と課題	『する、みる、支える』のスポーツとの多様な関わりの必要性や公正、責任、健康・安全等、態度の内容が身に付いていること、子供たちの健康の大切さへの認識や健康・安全に関する基礎的な内容が身に付いていることなど、一定の成果が見られる。
8	第1章総説、2体育科改訂の趣旨及び要点、(2) 体育科改訂の要点、①	運動領域においては、生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、スポーツとの多様な関わり方を場面に応じて選択し、実践することができるよう、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の育成を重視し、目標及び内容の構造の見直しを図ること。
8	第1章総説、2体育科改訂の趣旨及び要点、(2) 体育科改訂の要点、③	運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する観点から、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際、共生の視点を重視して改善を図ること。
17	第1章総説、2体育科改訂の趣旨及び要点、(2) 体育科改訂の要点、エ 指導計画の作成と内容の取扱いの改善、(イ) 内容の取扱いにおける配慮事項、エ 体験を伴う学習の充実	運動を通じて「する、みる、支える、知る」のスポーツとの多様な関わり方について、具体的な体験を伴う学習を取り入れたり、保健の実習を取り入れたりするなどの工夫をすることとした。
19	第2章 体育科の目標及び内容、第1節 教科の目標及び内容、1 教科の目標	自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けることであると考えられる。小学校においては、運動やスポーツが楽しさや喜びを味わうことや体力の向上につながっていることに着目するとともに、「すること」だけでなく「みること」、「支えること」、「知ること」など、自己の適性等に応じて、運動やスポーツとの多様な関わり方について考えることを意図している。
21	第2章 体育科の目標及び内容、第1節 教科の目標及び内容、1 教科の目標	運動やスポーツとの多様な関わり方ができるようにする観点から、運動やスポーツに対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、資質・能力の三つの柱をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図ることが大切である。
37	第2章 体育科の目標及び内容、第2節 各学年の目標及び内容、〔第1学年及び第2学年〕、1 目標	「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」を踏まえたねらいである。
67	第2章 体育科の目標及び内容、第2節 各学年の目標及び内容、〔第3学年及び第4学年〕、1 目標	「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」を踏まえたねらいである。
100	第2章 体育科の目標及び内容、第2節 各学年の目標及び内容、〔第3学年及び第4学年〕、2 内容、E ゲーム、(3) 学びに向かう力、人間性等、◎ 運動に意欲的でない児童への配慮の例	新しく提示した動きが分からないために、ゲームや練習に意欲的に取り組めない児童には、よい動きの友達やチームを観察したり、掲示物などの具体物を用いて説明したりするなどの配慮をする。
111	第2章 体育科の目標及び内容、第2節 各学年の目標及び内容、〔第5学年及び第6学年〕、1 目標	「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」を踏まえたねらいである。
143	第2章 体育科の目標及び内容、第2節 各学年の目標及び内容、〔第5学年及び第4学年〕、2 内容、E ボール運動、(3) 学びに向かう力、人間性等、◎ 運動に意欲的でない児童への配慮の例	新しく提示した動きが分からないためにゲームに意欲的に取り組めない児童には、代表の児童やチームが行う見本を観察したり、ゲーム中のポジションを確認したり、その動きを動画で確認したりする場を設定するなどの配慮をする。
168	第3章 指導計画の作成と内容の取扱い、2 内容の取扱い	運動領域の指導においては、各領域の内容との関連を図り、運動を通して「する、みる、支える、知る」のスポーツとの多様な関わり方について、具体的な体験を伴う学習を取り入れるよう工夫することを示したものである。

表2. みるスポーツ」実践関連記事一覧

年	月	目次	概要
2016	10	スポーツを「みる力」を高める体育理論を(齊藤隆志)	「みるスポーツ」がブームから文化として社会に根付くために、中学校、高校における体育理論の授業を通して、学校で「スポーツをみる力」を育成することの重要性を論じている。
2018	1	2018年はスポーツを「みる」力を育む絶好のチャンスである(宮嶋泰子)	スポーツをする体験がベースにあることで、スポーツを直接観戦する楽しさやテレビを通じて観戦する楽しさが倍増するとともに、そこに解説者などの第三者が存在することで楽しさが増加することを論じている。
2018	1	サッカーW杯を体育の教材に!(田嶋幸三)	2018年開催のサッカーW杯を目前に、文化としてのサッカーの見方やW杯と関連づけた体育授業を展開することについて述べたインタビュー記事が掲載されている。
2019	7	「みる・支える・知る」の関わり方から考える豊かなスポーツライフ(永田秀隆)	「する」「みる」「支える」「知る」といったスポーツとの関わり方において、いずれかの関わり方に限定するわけではなく、多様な関わり方を受け入れ、豊かなスポーツライフを生涯にわたって実践していくための力を養うことの重要性を論じている。
2019	7	学校体育における「みる・支える・知る」スポーツとは(高橋修一)	スポーツを「みる」ことに肯定的な回答をした児童生徒が多数であるというスポーツへの関わり方の現状と、学習指導要領の改定により記述が追加されたスポーツを「知る」ことが、スポーツを「する」「みる」「支える」ことの広がりや深まりを生むと論じている。
2019	7	走・跳の運動における「みる・支える・知る」楽しみ方(坂田祐也)	小学校体育の走・跳の運動において、「する」だけでなく「みる」「支える」「知る」という多様な運動の楽しみ方を感じることができるよう授業を計画・実践することで、多様な運動の楽しみ方を感じることができ、豊かなスポーツライフを育む素地をつくることにつながるという結果を報告している。
2019	7	「する・みる・支える・知る」楽しみ方を共有することができるマット運動の指導の工夫(小林大輔)	それぞれ異なるマット運動の課題について教えあい学び合う協働学習を通して、「する」「みる」「支える」「知る」という多様なスポーツの楽しみ方を学ぶことができた実践について報告している。
2019	7	「みる・支える・知る」スポーツイベントとしての運動会を構想する(玉木博章)	児童生徒全員が「する」ことに特化している運動会について疑問を投げかけるとともに、「する」「みる」「支える」「知る」の4つのスポーツへの関わり方が平等に扱われる(「しない」という参加の仕方もある)運動会の構想について論じている。

しかし、小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省, 2018)における「みるスポーツ」に関する記述を抽出した部分を見る限り、小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省, 2018)には「みるスポーツ」についての記述はあるものの「する」「みる」「支える」「知る」といった多様なかわり方が必要であると述べるに留まっている(表1)。すなわち「みるスポーツ」について「いつ」「何を」「どのように」というような具体的な点については明確な記述はない。例えば「第2章 体育科の目標及び内容、第1節 教科の目標及び内容、1 教科の目標」の「運動やスポーツとの多様な関わり方ができるようにする観点から、運動やスポーツに対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、資質・能力の三つの柱をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図ることが大切である。」と示されることからそれは明らかである。数少ない具体性のある内容が示されて

いるのは「運動に意欲的でない児童への配慮の例」のみである。しかし、これは「運動に意欲的でない児童への配慮の例」であり、「動きがわからないためにゲームに意欲的に取り組めない児童には」とある通り、運動・スポーツを「する」時のサポートとしての役割で「みる」ことの内容が示されているのであって、スポーツを「みる」ことの楽しさを具体的に示したものではない。あくまでスポーツを「する」ときの補助という限定的且つ手段的役割と捉えることができる。

前述してきたように小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省, 2018)における体育科の目標と内容のそのほとんどがスポーツを「する」ことをベースとした記述である。これは小学校における体育という教科の学習指導要領が、読み手側からすると「するスポーツ」へ偏重していると解釈が可能である。学校教育の指針となる学習指導要領が読み手にとって「するスポーツ」偏重であるとすれば、

それは無意識下で現場の教員にその偏りが伝わり、授業に表出する可能性があることは否めない。したがって、小学校における体育授業そのものがスポーツを「する」だけのものへと偏重していく可能性があることを意味するものである。実際、学習指導要領の改定により、体育科において「型に共通する動き」の習得が重視され、明確に指導すべき事柄として示されることによって、明らかに技能の習得に重きを置いた授業実践が暗黙のうちに広がった可能性が指摘されている。(坂本, 2013)

また「するスポーツ」偏重の傾向は日本において体育が「手段的」に扱われてきたことも拍車をかけていると推察できる。学校体育指導要綱(文部省, 1947)における体育の目標である「体育は運動と衛生の実践を通して人間性の発展を企図する教育である。それは健全で有能な身体を育成し、人生における身体活動の価値を認識させ、社会生活における各自の責任を自覚させることを目的とする」に代表されるように、運動を「する」ことで心身の鍛錬や人間的成長に効果があるため、体育が重要だとする考え方である。この考え方のもとでは、運動を「する」という具体的な行為があるからこそ効果が得られることになる。そのため学校体育では「する」ということが重視され続けてきたという側面も十分に考えられる。

2. 体育授業実践における「みるスポーツ」

スポーツへの多様な関わり方が重要であると示しながら、その実態は「するスポーツ」に傾重しているというのが学習指導要領の示す小学校体育におけるスポーツへの関わり方の特徴であることは前述したとおりである。では、実際に学校現場においてスポーツはどのように教材化され、授業として実践されているのであろうか。学校体育の授業において、学習指導要領の内容が教員の授業実践に影響をもつことを明らかにするためには、体育の授業実践の傾向を知ることが大きな意味をもつ。本論では、体育授業実践の研究発表の場として中心的な役割を担ってきた体育専門誌「体育科教育」(大修館書店)の2008年1月から2019年11月に掲載された記事のタイトル分析を中心にその傾向を探る。

2008年の1月号から体育科教育内の記事タイトルを追っていくと、「するスポーツ」に関わる記事が大半を占め「みるスポーツ」に関する記事がほとんどないことに気づく。特に、実践報告や授業提案など学校教育や子どもたちの学習といった視点で「みるスポーツ」について書かれている記事は極端に少なくなり、全8記事に留まる(表2)。雑誌「体育科教育」は各号によって若干の前後はあるもののエッセイ等も含めると1号に25ほど多く記事が載る。

25記事×12ヶ月×10年で概算5400程度の記事が10年間で掲載されることになるが、記事の総数から考えると割合にして0.05%程度という「みるスポーツ」の実践に関する記事が圧倒的に少ないことがわかる。

さらに詳細にみていくと、2008年から2015年、そして2017年は「みるスポーツ」に関する実践関係記事は1つもない。それどころか「みる・支える・知る」スポーツが特集された2019年7月号以外で、教育に関わる「みるスポーツ」についてタイトルに示す記事は2016年10月号の「スポーツをみる力を高める体育理論を」と2018年1月号の「2018年はスポーツを「みる」力を育む絶好のチャンスである」、「サッカーW杯を体育の教材に!」の3編だけである。加えて2018年の「2018年はスポーツを「みる」力を育む絶好のチャンスである」と「サッカーW杯を体育の教材に!」の記事は、インタビューに近い形式となっており、実践に関わる内容については記されていない。一方、純粋な体育授業実践としての記事は「走・跳の運動における「みる・支える・知る」楽しみ方」と「「する・みる・支える・知る」楽しみ方を共有することができるマット運動の指導の工夫」、「「みる・支える・知る」スポーツイベントとしての運動会を構想する」の3編だけである。加えて、「「みる・支える・知る」スポーツイベントとしての運動会を構想する」の記事は、実践報告ではなくあくまで構想に留まっている。

以上のことを総合的に考察すると、体育授業実践は「するスポーツ」に傾重していると捉えることができ、これまで体育授業では「みるスポーツ」がほぼ扱われてこなかったという事実が浮き彫りになったものと解釈できる。

また、2016年の「スポーツを「みる力」を育む体育理論を」という記事以外には「みるスポーツ」の実践に関わる記事は2019年の7月号だけである。一方で2019年には、「する」以外の「みる・支える・知る」スポーツに焦点があたったタイトルが見られるが、これは特筆すべき内容であるかもしれない。その背景となり得る社会的な要因は二点ほど指摘することができる。

まず一点目として挙げられることは、学習指導要領改定が大きな理由である。これまでほぼ取り上げられてこなかった「みるスポーツ」を含めた「するスポーツ」以外のスポーツへの関わり方が特集として組まれたことと、学校の教育活動の指針ともいえる学習指導要領が改定され「みる・支える・知る」といった多様なスポーツへの関わり方の重要性が示されたこととの関係性は十分にあると考えられる。特に2019年7月号に掲載された「みるスポーツ」関連の記事の全てで、「見る」、「支える」に加え「知る」が雑誌タイトルに含まれていることはその証明として指摘できよう。なぜなら学校体育においてスポーツといえばこれ

までは「する・見る・支える」の三つの関わり方が示されてきたのに対し、2017年告示の新学習指導要領ではその三つの関わり方に「知る」が加えられているからである。上述の各タイトルに「知る」が明確に含まれていることから、特集として「みる・支える・知る」というスポーツへの関わり方が取り上げられた背景には、大きな要因の一つとして学習指導要領の改訂が極めて大きく関わっていることが理解できる。

また、二点目としては東京2020オリンピック・パラリンピックとの関わりである。オリンピック・パラリンピックという世界的なスポーツの祭典を東京で行うということは、東京および日本国民のスポーツへの関心が大いに高まっていくことは事実であろう。また、「スポーツを「みる力」を高める体育理論を」が掲載された2016年10月は、リオデジャネイロオリンピックが閉会した直後の「体育科教育」であるし、特集号が組まれた7月は夏季オリンピックである東京オリンピックが開催される丁度1年前である。さらに7月は、5月の第一次観戦チケットの販売が終了した直後である。加えて、極一部の選ばれた競技者しか「することができないオリンピック・パラリンピックは、多くの人にとって「する」ものではなく「みる」ものであり、「支える」「知る」ものであるだろう。このような背景から体育授業は「するスポーツ」だけでなく「みるスポーツ」をはじめとしたスポーツへの多様な関わり方が大切であるという視座を後押ししていることは十分に理解することができる。

坂本(2013)が、改定に伴い変更された学習指導要領内の記述に合わせて体育授業実践が揺らぐ可能性を指摘したように、2019年に「するスポーツ」ではない実践が記事として掲載された点については、学習指導要領を中心にオリンピック・パラリンピックの開催を後押しとして、これまで体育授業が「するスポーツ」に画一化され扱われてこなかった「みるスポーツ」に焦点が当たるよう体育授業実践に揺らぎが見えているという解釈が成り立つかもしれない。

3. スポーツのみかたの多様化と学校体育で「みるスポーツ」を扱うときの視点

「生涯にわたって豊かなスポーツライフを送ること」、学校体育でこの目標を達成しようとしたとき、日常に根付いた「文化」としてのスポーツという視点を無視することはできない。その視点が無視されると、学校体育が日常に存在するスポーツから切り離されることを意味し、日常生活でスポーツに親しむことに全くつながらなくなってしまう危険性を孕んでいるからである。しかし、学校教育においては子どもたちが理解しやすいように、あるいは教えやすいようにというようなことを理由にしばしば様々な「もの

や「こと」が学校の型にはめ込まれる。それは小坂(1999)が「ラインサッカーはサッカーとは違うけど面白かった」というような子どもの感想を例にあげながら「学校文化化」という課題を指摘するように、学校体育でも例外なく起こっている。もちろん「子どものために」教材を工夫することは教師にとって必要不可欠な仕事である。しかし小坂(1999)が指摘するとおり、学校という極小空間の中だけのことで教材を捉え、その後の日常生活での活用を全く意識せずに教材を「学校文化化」しているとすればそれは大きな問題である。特に体育では「豊かなスポーツライフを送ること」が目標になっているのであり、そこでいうスポーツライフは間違いなく日常に在る「スポーツ」がベースになっているからである。スタジアムに観戦に行くサッカーは「ラインサッカー」ではなく「サッカー」であるし、地域のバスケットボールサークルも「ポートボール」ではなく「バスケットボール」をベースにした活動である。これは種目をそのまま体育の授業で教えるべきであるという主張しているのではなく、学習指導要領(文部科学省, 2018)において「生涯にわたって運動やスポーツを日常生活の中に積極的に取り入れ、生活の重要な一部とすることを目指している」と示される通り、「スポーツを日常化」することの必要性を指摘するものである。だからこそその時重要になるのは、「学校文化化」され日常との接点を完全に無くしてしまった「学校スポーツ」ではなく、それぞれの人々の日常に存在するスポーツそのものをいかに活用するかという視点である。(坂本, 2013)そしてその日常に存在するスポーツとは文化としてのスポーツのことであり、スポーツを文化として捉えるのであれば当然そのスポーツを成しているのがスポーツを「する」ことだけではないと解釈するのが自然であろう。(佐伯, 1984)文化としてのスポーツに日常で触れようと思った時、多くの人にとってその距離が近いのは前述したとおり明らかに「みるスポーツ」であろう。そう考えると学校体育においてスポーツを文化として捉え、文化としてのスポーツを「みる」ことを重視するという視座に立つ必要性がみえてくる。

多くの人にとってスポーツとの接点の大部分を学校体育の時間が担っている。そう考えると体育が「生涯スポーツ」を目指し、学校体育を通して文化としてのスポーツに参与する素地をつくるためには、体育授業でもっと「みるスポーツ」に触れる必要があるといえるだろう。

齊藤(2016)は、スポーツをみる力は、「①事前知識(観戦する種目に対する経験値、事前情報)②知性(事前知識を使って論理的に思考する)③感性(素直にスポーツに感動する力)④評論・表現力(知性によって思考したことを表現する力)⑤組織化力(「みる」を日常化するために主体的に

行動できる力)」の5つに分類できると報告している。

また、岡崎(2008)は、「みるスポーツ」の重要性を説く中で、「つまり、「観るスポーツ」においても、そのスポーツを理解し、プレーに感動するには、学校体育の中で多様なスポーツに触れ、運動学習による認識、俗に言う「体が覚えている」という体験がベースになっていると考えられる」というようにスポーツを「する」体験があることによって「みるスポーツ」を楽しむことができると指摘している。これらの報告はスポーツを「する」ことで、具体的な場が想像できたり、難しい技術をみてすごいと思えたりと、「みるスポーツ」を深めることができる可能性を示唆している。しかし、サッカーファンの大部分でサッカーをしたことがない人がいたり、野球ファンの大部分で野球をしたことがない人がいるように、それだけでは、「みるスポーツ」の魅力は十分に語り切れていない。

スポーツを「する(した)」ことだけをベースにスポーツを「みる」とすると、自分が想像できないようなプレーを楽しむ余地はなくなってしまし、身体に障害を抱えるなどの理由でスポーツをしたことがない人はそもそも「みるスポーツ」を楽しむことができないということになってしまふ。また現代では、インターネット等のネットワークやテクノロジーの進化により、スポーツは「いつでも」、「だれでも」、「どのようなみかたでも」みることができるようになった。だからこそ画一化された「真面目」なスポーツのみかたのみではなく、スポーツを「みる」ということの面白さを児童期に体感し、様々なみかたを知ることで自分に合ったみかたを選択することができる力を育むような授業を、日常の体育授業から積極的に取り入れていく必要があると考える。学校体育において多様なスポーツのみかたに触れ、それぞれに合ったスポーツのみかたを選択できるようになっていくことで初めて、本当の意味で日本のスポーツが文化として人々に享受されるようになっていくだろう。そのためには学校体育が「みるスポーツ」をどう位置付けていくのが極めて重要であり、「するスポーツ」と同様に指導内容が精査され、系統性をもって展開されることが必要であると考えられる。

V. 今後の課題

「みるスポーツ」で多様なスポーツのみかたを享受できるような授業については本研究では具体的に提示するには至らなかった。また、本報告では「みるスポーツ」に関連する資料や文献の収集が不足していたため、スポーツのみかたが「どのように」多様化しているのかなど、より多角的な分析・考察が不十分であったことは否めない。多角的な

分析・考察を加えていくことで、どのような「みるスポーツ」の体育授業を行なっていくか具体的な授業構成や指導方法を検討することを今後の課題としたい。

VI. 結論

国の指針である学習指導要領の記述を分析するとスポーツを「する」ことだけでなく、「みるスポーツ」をはじめとした多様なスポーツへの関わり方を重視している一方、そこで示される内容は「するスポーツ」に関するものに傾重しており、「みるスポーツ」で具体的に「いつ」「何を」「どのように」教えるかが示されていないという課題を指摘することができた。加えて、学習指導要領が「するスポーツ」に傾重していることが要因の一つとなって、体育授業実践においても「みるスポーツ」に焦点を当てた実践が行われていないという可能性がある一方、今回の学習指導要領改訂と東京2020オリンピック・パラリンピック開催を契機に、その傾向に揺らぎが起きる可能性が示唆された。

また、生涯スポーツを志向する学校体育であるからこそ「文化」としてのスポーツという視座が必要であり、「する」ことだけに終始するのではなく、多様なスポーツの「みかた」を享受できるような内容の精査、授業構成や系統性の検討が必要であることも示唆された。

文献

- 岡崎勝博(2008)：スポーツ文化を創る保健体育授業を。体育科教育 2008年1月号, 大修館書店, pp48-51.
- 小坂美保(1999)：学校文化としての教材と社会の関係に関する一考察：特に小学校のサッカー教材について。日本体育学会第大会号 50, 275.
- 小林大輔(2019)：「する・みる・支える・知る」楽しみ方を共有することができるマット運動の指導の工夫。体育科教育 2019年7月号, 大修館書店, pp29-33.
- 齊藤隆志(2016)：スポーツを「みる力」を高める体育理論を。体育科教育 2016年10月号, 大修館書店, pp28-31.
- 佐伯聰夫(1984)：第一部 スポーツ社会学の理論と方法 第3章 スポーツの文化。In: 菅原禮(編著), スポーツ社会学の基礎理論。不昧堂出版。
- 坂田祐也(2019)：走・跳の運動における「みる・支える・知る」楽しみ方。体育科教育 2019年7月号, 大修館書店, pp24-28.
- 坂本史生(2013)：体育授業における教材の文化性の活用についてーサッカーとフットサルに焦点づけてー。東京学芸大学大学院教育学研究科。

- 佐藤充宏(2011): スタジアムのサッカー観戦者における視的経験の空間という視座: 徳島のプロサッカー試合による賑わい創出に向けて. 徳島大学総合科学部人間科学研究 **19**, 101-120.
- 杉本厚夫(2016): 観戦学の視座—多様化する観戦の楽しみ方—. 体育の科学 **65** 巻10月号, 杏林書院, pp710-714.
- スポーツ庁(2018): 平成30年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」について(平成31年2月28日発表), 調査結果の概要.
http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2019/04/19/1415960_001.pdf (2019年11月29日アクセス)
- 田嶋幸三(2018): サッカーW杯を体育の教材に!. 体育科教育 **2018**年1月号, 大修館書店, pp24-27.
- 高橋修一(2019): 学校体育における「みる・支える・知る」スポーツとは. 体育科教育 **2019**年7月号, 大修館書店, pp16-19.
- 玉木博章(2019): 「みる・支える・知る」スポーツイベントとしての運動会を構想する. 体育科教育 **2019**年7月号, 大修館書店, pp38-41.
- 永田秀隆(2019): 「みる・支える・知る」の関わり方から考える豊かなスポーツライフ. 体育科教育 **2019**年7月号, 大修館書店, pp12-15.
- 橋本純一(2015): 観客と視聴者の相違. 体育の科学 **65** 巻10月号, 杏林書院, pp715-719.
- 松田恵示・松田雅彦・島崎 仁・坪田信道(共編)(1997): スポーツ文化と教育—人間とスポーツの新たな関わりを求めて—. 学術図書出版社.
- 宮嶋泰子(2018): 2018年はスポーツを「みる」力を育む絶好のチャンスである. 体育科教育 **2018**年1月号, 大修館書店, pp16-19.
- 文部省(1947): 学校体育指導要綱.
- 文部省(1998): 小学校学習指導要領解説 体育編.
- 文部科学省(2008): 小学校学習指導要領解説 体育編.
- 文部科学省(2017): 小学校学習指導要領解説 体育編.

The Importance of "Spectators" in Elementary Physical Education

Fumio SAKAMOTO

School of Education, Tokyo University of Social Welfare (Ikebukuro Campus),
2-47-8 Minami-ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-0022, Japan

Abstract : While the Educational Curricula of Japan's Elementary schools place a high value on the teaching of Sports, the emphasis consistently remains on its “doing”, and we believe little is taught in comparison about the “seeing” aspect of the sports culture. Our research of the country's Elementary Physical Education Curriculum suggests there is an absence of teaching methods and practices in the appropriate observing and spectating of sports, specifically in three key components, the “when”, “how” and “what” to see. In the Elementary school course of studies, and we propose that its inclusion in the construction of Educational Curriculum is of utmost importance. The suggestion is made that a greater emphasis be placed on teaching the various methods of "Spectator Sports" and its appropriateness.

(Reprint request should be sent to Fumio Sakamoto)

Key words : Physical education, Spectator sports, Physical education class practice

